

ニュースレター

いりおもての森から

林野庁 九州森林管理局
西表森林生態系保全センター
平成31年2月発行 No.55号



ヒメツルアダン

イリオモテヤマネコを交通事故から防げ

環境省西表野生生物保護センターは、平成30年が過去最多のペースでイリオモテヤマネコの事故が発生していることを受け、昨年の11月末に非常事態宣言が発令されました。(7件発生)

このことを受け、イリオモテヤマネコ等の希少動物の交通事故死等を防ごうと環境省西表野生生物保護センター(イリオモテヤマネコの交通事故発生に関する連絡会議メンバー)が、平成30年12月12日、14日に県道215号線沿い(竹富町高那、古見)の草刈り作業及びネコボックスの清掃活動を行いました。



一生懸命に草刈り作業を行う参加者

当日は、保護野生生物保護センター駐車場に集合し、現地に着後、環境省職員から作業内容及び班分け等の説明を受け、当センター職員も含め総勢22名参加し作業を開始しました。

参加者は、ヤマネコを守るため、道路沿いの生い茂った雑木や雑草を一生懸命に草刈り機や釜を使って刈り払いを行いました。

世界自然遺産登録に向けて、イリオモテヤマネコの事故防止にかかる課題もある中、草刈りを行い、道路に飛び出すイリオモテヤマネコを察知できるよう、事故防止につなげようと実施されました。

今後も交通事故防止に向け、地域の方々と関係機関が協力し合いながら各種活動に参加して行きたいと考えます。

「沖縄外来種対策連絡会議」に出席

平成31年2月22日に沖縄県市町村自治会館において「平成30年度沖縄外来種対策連絡会議」が開催されました。

この連絡会議は、沖縄地域における外来種に係る情報に関係行政機関(日米陸海空軍、沖縄防衛局、沖縄森林管理署、当保全センター、沖縄県、農林水産省動物検疫所、植物防疫事務所)で共有し、効果的・効率的な手法による防除等を促進させ、沖縄県における生物多様性の保全に寄与することを目的としています。

会議では、各行政機関から平成30年度の外来種駆除対策の実施状況と結果及び平成31年度の実施計画について、情報を共有し意見交換を行いました。

午後から外来種対策担当者を含め「侵略的外来種に関するセミナー」が行われ、科学技術大学院大学の吉村博士から「侵略的外来種ヒアリが及ぼす影響や対策について」講話があり、参加者は鋭いまなざしで聞き入っていました。



連絡会議の様子

前良川・後良川・浦内川・与那田川マングローブ林の生育調査を実施

平成30年12月19日に前良川、後良川、与那田川、平成31年1月16日、17日には、浦内川流域のマングローブ林の生育状況調査を実施しました。

本調査は、3年毎実施する生育等調査で、調査木の生育状況、光環境、稚樹の発生状況、地盤高の調査を行いました。

3年毎の調査となることから、樹木に標示されたタグが見えにくいものや判らないものがあったことから、同時にタグの取付け等も行いました。

調査の結果、それぞれの河川のマングローブ林とも前回の調査と比較して特に大きな変化は見られませんでした。浦内川では、開空度の数値が平均で5%下がっており、その要因としては、近年大きな台風が襲来してないことが関係していると思われます。



マングローブ林内の調査の様子



石西礁湖自然再生協議会「海域・陸域対策部会」に出席

平成31年2月26日(火)に環境省国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターにおいて「石西礁湖自然再生協議会平成30年度部会」が開催されました。

同協議会は自然再生推進法に基づき、石西礁湖(石西礁湖に影響を及ぼす陸域と海域を含む)の自然再生を推進するため、必要な事項について協議することを目的としています。

今回、計画的に取組を実施して行くため、「海域・陸域対策部会」、「普及啓発・適正利用部会」、「学術調査部会」の3つの部会が開催されました。

「海域・陸域対策部会」のなかでは、当センターの取組内容の説明を行い、取組活動の情報共有と連携について確認しました。

「豊かなサンゴ礁の姿を取り戻す=守る」を目標に

- 赤土流出防止対策
 - ・台風、大雨等に起因する山地災害等が発生した場合や立木の伐採、公共工事等の事業が実施される場合は、赤土等流出防止対策等を講じた対応を実施する。
- 漂流・漂着ゴミ対策
 - ・西表島国有林の海岸線において、定点観測による漂流・漂着ゴミの状況調査を行い、関係機関と情報を共有し、ビーチクリーン活動へ積極的に参加する。
- 沿岸域の生態系の再生
 - ・マングローブ林や海岸林の保全・再生を計画的に実施し生態系の再生を図る。

この3つの目標の達成に向け取り組みます。



海域・陸域対策部会の様子

「国内希少野生動植物種」に追加指定

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）に基づき、国内に生息・生育する絶滅のおそれのある野生生物のうち、人為的な影響により減少が見られる種等を「国内希少野生動植物種」に指定しています。

クロボウモドキ

バンレイシ科の常緑高木で、樹高15m位になります。
幹は直立し、樹皮は黒褐色です。
葉は互生、長楕円形、革質で、長さ15～25cm、先端は尖り、基部は円形、無毛で、表面は光沢があります。
果実は枕状楕円形、長さ3～4cm、熟すと赤色から黒色になります。
種子は枕形、直径1.5～2cm、長さ2～3cmです。



タシロママ

石垣島と西表島だけに自生するマメ科の常緑高木で、樹高は20m以上にも達する。

材は堅く、シロアリの害にも強く建築材や家具として古くから伐採され減少。

葉は羽状複葉で互生し、小葉は楕円形、革質は5～10cmの長さで無毛。

果実は大型で扁平、長楕円形で長さ20～25cm、幅5～7cmです。



海岸林自然再生試験地の生育状況調査を実施

平成31年2月6日～7日の両日、南風見国有林172に林小班外の海岸林自然再生試験地において、生育状況調査を実施しました。

この海岸林では、台風被害等により裸地化した箇所に外来種である「ギンネム」が侵入・繁茂し、在来種による森林再生を阻害しています。

「ギンネム」は、成長のスピードは早いものの、台風等の強風には弱く、幹折れや枝葉の四散で大きな林冠を形成することができません。

そんなことから防風・防潮の機能を高めた豊かな森林に復活させることを目的に

海岸林自然再生試験地(調査区1～4)を設定し、在来種であるテリハボク等の生育状況等の調査を行っています。

この海岸林には、中・高層の立木がなく、横への生長が著しいオオバギやオオハマボウ、ヤンバルアカメガシワ等が主林木となっており、将来には、テリハボク、フクギ、イヌマキ等が主林木となることを期待します。



ギンネム(左)とテリハボク、フクギ



試験地の生育調査を行っている様子

ヒナイ川・西田川の利用状況調査を実施

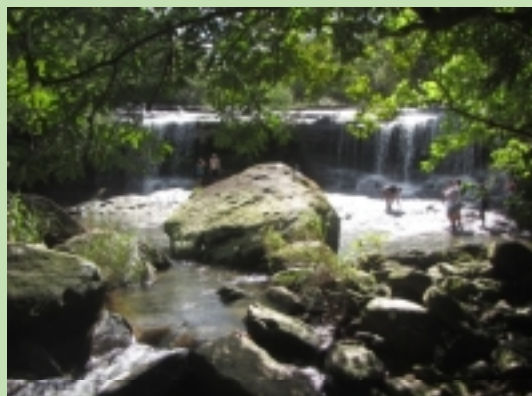
平成31年2月7日(木)に西田川、2月13日(水)にヒナイ川の利用状況調査を実施しました。西田川の調査当日は、晴れ時々曇りの天候でしたが、徐々に気温も上がり、水温もさほど低くなく、訪れた観光客も、水遊び等を思い思いに楽しんでいました。

なお、結果は、カヌーツアーとSUPツアーで3組、17名(ガイド含む)の入り込み者数となりました。

また、ヒナイ川の調査当日は、曇りの天候でしたが、明け方までの雨で滝に落ちる水の量は多かったようです。例年、この時期は観光客もあまり多くなく、また、天候等の影響もあり、調査結果は、カヌーツアー7組、31名(ガイド含む)の入り込み者数でした。



ヒナイ川の利用者



西田川の利用者

西表島の樹木

ブーゲンビリア

オシロイバナ科

分 布	中南米原産
葉 の 形	卵形、長卵形等
葉 の 縁	全 縁
葉 の 先	鋭 尖 形
葉の付方	互 生
葉の種類	単 葉
花・萼色	赤色、白色等多色

ブーゲンビリアはオシロイバナ科のブーゲンビリア属の常緑のつる性低木です。南国を象徴する熱帯花木のひとつです。多くの園芸品種があり、赤紫、桃色、黄色、白などのバリエーションがあります。花弁のような包葉が美しく、包葉から突き出た小さな花はあまり目立ちません。日中温度が20~25℃以上でつぼみをつけるため、年2回ほど開花します。



ヒメツルアダン 「タコノキ科」 *Ptycinetia tawadana* Y.Kimura

絶滅危惧IB類



日本では西表島だけに生息する木本のつる性植物です。長さ5~6m、大きいものは10mになります。茎は径6~10mm 葉は線形で長さ10~20cm 幅8~15mmです。雌雄異株と思われ、雄花は知られていません。

林野庁 九州森林管理局 西表森林生態系保全センター

〒907-0004 沖縄県石垣市登野城 55-4 石垣地方合同庁舎内
TEL : 0980-88-0747 FAX : 0980-83-7108

URL: <http://www.kyusyu.kokuyurin.go.jp/huresen/huresentop.htm>

